

農村集落における風景と生活の変遷の記述 —大分県竹田市志土知地区を対象として—

竹本 福子¹・福島 秀哉²・中井 祐³

¹非会員 (〒471-0826 愛知県豊田市トヨタ町1, E-mail:lftakemoto@gmail.com)

²正会員 修士(工) 東京大学大学院助教 工学系研究科社会基盤学専攻
(〒113-8656 東京都文京区本郷7-3-1, E-mail:fukushima@civil.t.u-tokyo.ac.jp)

²正会員 博士(工) 東京大学大学院教授 工学系研究科社会基盤学専攻
(〒113-8656 東京都文京区本郷7-3-1, E-mail:yu@civil.t.u-tokyo.ac.jp)

地方の農村風景は、近年の高齢化や過疎化に伴い、農業の衰退や生活様式の変化と共に変容してきた。本研究では、農村集落である大分県竹田市志土知地区を対象として、オーラルヒストリーを用いた集落の生活史に関する口述の収集・記録・整理を行い、集落の風景と生活の関係性に着目した分析を行った。志土知地区では、農業の近代化や人口減少により生活が大きく変化する中で、集落を支える様々な人の集いが存在し、それが風景を構成する重要な要素の1つとなってきたことを示した。

キーワード: 農村集落, 風景, 生活, オーラルヒストリー, 志土知

1. はじめに

(1) 背景

大分県竹田市では、全国で初めて農村回帰宣言を打ち出し、その支援事業として地区外からまちづくりの担い手の移住を推進しており、本研究の対象地である志土知地区もその対象地となっている。

近年、このような例をはじめ、外部からのまちづくりの協力者とともに、地域の歴史、文化、風土や、それによって生み出される風景と丁寧に向き合うまちづくりが求められている。その一方で、地方の農村風景は、高齢化や過疎化に伴い、農業の衰退や生活様式の変化と共に変容してきており、まちづくりを進めていく上では、集落の風景と人々の暮らしの関係性やその変遷に関する情報について、関係者が共有していくことが重要だと考えられる。

しかし、農村集落の多くでは、集落の生活史について記録や語り手が不足しており、共有すべき情報が十分蓄積、整理されていないことが多く、適切な手法による情報の収集、整理、共有が求められていると言える。

地方集落の景観の変遷について、風景と人々の生活を考察した研究は多く、農村地域については、棚田と農作業の関係性に着目する栗田¹⁾の研究や、井路と、それを維持してきた共同体の構造変化を考察する山田²⁾の研究などがあげられる。

また、地域の生活に関する情報収集とまちづくりへの活用に口述記録を適用した例として、後藤³⁾のオーラル

ヒストリーを手法とした一連の研究がある。オーラルヒストリーとは、対象者への倫理的配慮や、適切な口述情報の収集、記録、整理手順に従うことで、文献資料が乏しい対象地において一次資料に準ずる記録が作成できる手法である。この手法の利点は、語り手にとって身近な日常や出来事を具体的に聞き出していくインタビュー形式により、住民にとって改めて風土や文化として認識されにくい、風景と生活の関係性を見出す手立てとなるところにあると考えられる。

(2) 目的

本研究の目的は、大分県竹田市志土知地区を対象として、オーラルヒストリーを手法として口述記録を収集整理し、集落における暮らしと風景の関係性、またその変遷について分析考察を行い、今後の農村集落におけるまちづくりへの示唆を得ることとする。

(3) 対象地

本研究の対象地は、大分県竹田市志土知地区の農村集落とする。標高400mの急傾斜地域で継続的に稲作を行い棚田風景を維持し、農業の機械化、人口減少、基盤整備、集落営農の開始などによって暮らしと風景が変化してきた。集落人口112人(2012年9月30日現在)に対して高齢化率は42.5%と極めて高いが、近年は法人である「紫草の里営農組合」を主体としてまちづくりに取り組んでおり、2012年11月には絶滅危惧種ムラサキの復興運動や染物体験が九州農政局長賞を受賞している。

2. 調査概要

本研究で用いたオーラルヒストリーの手順を図-1に示す。

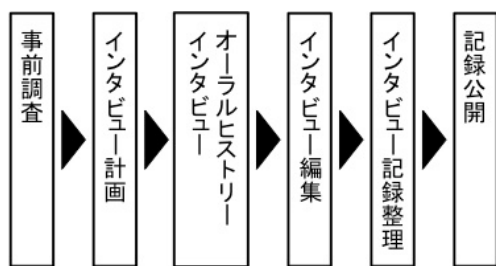


図-1 オーラルヒストリーの手順

(1) 事前調査

事前調査、インタビュー調査など現地における調査に先立って、文献資料を元に集落に関する歴史年表と平面図を作成した。

また事前調査では、オーラルヒストリーインタビューの構成と内容を検討するにあたって、志土知集落の生活における共通体験などを把握するため、営農組合の方々9名にヒアリングを行った。ヒアリングの際には集落の歴史年表と平面図を広げ、年代や場所に関しては具体的に示してもらおう努めた。

事前調査より、近年、基盤整備と集落営農を始めたこと、1990年と2012年に起きた大豪雨災害が人々の暮らしと風景を大きく変えたことなどが分かった。また、志土知集落の生活を分析する視点として、生業、インフラの維持管理、地域行事などが浮かび上がった。

(2) オーラルヒストリーインタビュー

実施したオーラルヒストリーインタビューの実施概要と対象者を表-1、表-2に示す。インタビューでは、特に生活（生業、インフラの維持管理、地域行事）の変遷と、それに伴う風景の移り変わりに着目してすすめた。

表-1 インタビュー実施概要

日程	2012年11月14日(水)～18日(日)
場所	自宅9組、担い手センター2組、宮城公民館分館1組
対象者	志土知住民の方及び学校関係者16名、12組(兼業農家13名、専業農家2名、教員1名)
時間	各インタビュー1時間程度
構成	(1) 自己紹介と研究説明 (2) 記録の了承を得る (3) 生年月日、出身地の確認 (4) 略歴(小学校～就職)の確認 (5) 地域行事について (6) 生業やインフラ整備について

表-2 インタビュー対象者

日程	人	年齢	性別	出身	職業
2012/11/14(水)	A	60代	男	志土知	会社員, 農業
	B	70代	男	志土知	会社員, 農業
2012/11/15(木)	C	60代	男	志土知	公務員, 農業
	D	60代	女	県外	農業
2012/11/16(木)	E	70代	男	志土知	農業
	F	70代	男	志土知	農業
	G	70代	男	炭竈	農協
2012/11/17(金)	H	70代	男	炭竈	農協
	I	60代	女	豊後高田	会社員, 農業
	J	70代	男	志土知	農業
	K	70代	女	明治	農業
	L	90代	女	志土知	商店
	M	60代	男	県外	教育関係
	N	60代	男	志土知	農協, 農業
2012/11/18(土)	O	70代	男	志土知	建設業, 農業
	P	70代	女	菅生	農業

(3) インタビュー編集・記録整理

インタビューをオーラルヒストリーの記録としてまとめるため、まず音声録音を書き起こした(第一次書き起こし)。第二次書き起こしで、固有名詞の置き換えや指示語の補足を行い、各インタビューの内容を参照しやすくするため、概要とあらすじをまとめたログを作成し、「志土知オーラルヒストリー」を完成させた。また、口述で曖昧な年代、社会背景、用語については、地方史や農業史等の文献による補足、確認を適宜行った。⁴⁾⁵⁾⁶⁾⁷⁾⁹⁾

(4) 口述によって浮かび上がった風景

口述記録により、既往の文献には記載の無い地区の歴史や風景に関する情報が得られた。その例を表-3に示す。

表-3 口述によって浮かび上がった風景

例1) 水車について
昔は見上げるほど大きな水車が宮ヶ瀬井路沿いに並んでおり、このような風景は1990年の大災害が起き、農作業においてポンプアップが普及する以前に日常風景として存在し、人々に共有されていた。
例2) 茅葺き、茅場、茅葺き屋根について
昔は茅葺きが行われ、茅場や茅葺き屋根が志土知の風景としてあった。しかし、1957年の国有林倍増計画を背景とする植林ブームによって茅場は減り、茅葺き屋根も現在の瓦屋根へと変わっていった。
例3) 盆踊り、獅子舞の例
志土知では秋祭りが毎年9月14日に紫八幡社で行われてきた。1950年代頃は太鼓や鐘に合わせて獅子が無い、子供たちが男女大勢で団扇を持ち「団子(だんす)」を踊った。一重では回りきれず二重になって踊り、青年団も参加していた。昔は志土知公民館前に広場があり、そこまで子供たちに先導された獅子がねり歩いた。

3. 風景と暮らしの関係性：「集い」

生業、インフラの維持管理、地域行事に着目して、口述記録の分析したところ、集落の生活の変化の中で、それを支える様々な人の集い方が存在し、時代によって解体や補完がおこなわれてきたことや、道路や井路といったインフラを維持管理する集いが現代まで継続されていることが分かった（図-2参照）。

そこで、集落における人々の集いの変遷について、「～1950年代前半」（表-4、図-3参照）、「1950年代後半～1980年代半ば」（表-5、図-4参照）、「1980年代後半～現在」（表-6、図-5参照）と集落の暮らしが大きく変化したと思われる3つの時代に分けて整理を行った。

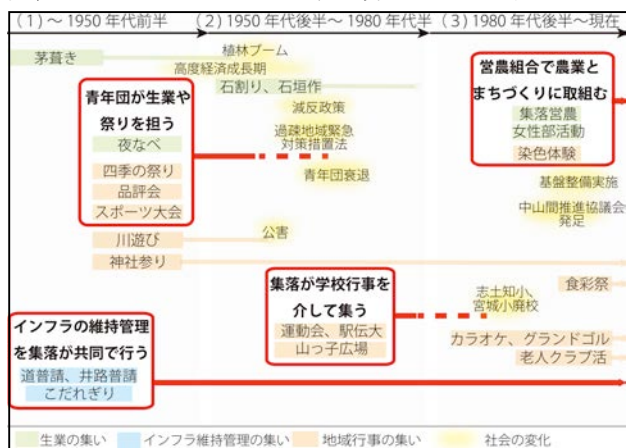


図-2 集いの変遷

表-4 ～1950年代の集落における集い

～1950年代前半		
高度成長期の1954年～1971年頃は、志土知で暮らす子供と若者が多く、青年団を中心に集落の生業やお祭りが盛り上がっていた。		
集い方	内容	
a	繁華街に集まる	宮城に村役場と商店があり、地域一番の繁華街として賑わっていた。
b	子供たちが学校に通う	宮城小学校に志土知集落の子供たちが多く通い、昭和30年代には400人ほどの生徒がいた。
c	農業祭など行事で交流する	志土知と炭竈の堺に宮城峠と言われる場所があり、農業祭、体育祭、慰霊祭などが行われた。志土知の子供にとっては宮城小への通学路でもあり、相撲取りなどをして遊んでいた。
d	子供たちが川で遊ぶ	公害の影響や護岸整備によって川原がなくなる以前は、子供たちは玉来川で水遊びや魚捕りをして遊んでいた。
e	青年団が夜なべをする	集落内にいくつかあった夜なべ小屋では、青年団が集まり藁仕事を行っていた。
f	集落が祭りで集う	子供が多く、四季の祭りで神楽、獅子舞、太鼓、笛などで賑わっていた。近年は少子化、担い手不足で獅子舞の継続は難しくなっており、平成24年は災害の影響でお祭りが行われなかった。

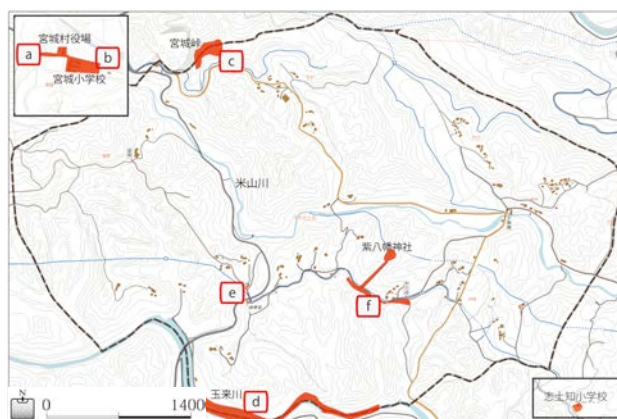


図-3 ～1950年代の集落における集いの場所

表-5 1950年代後半～1980年代の集落における集い

1950年代後半～1980年代半ば		
子供が減少し始めると、代わりに地域の大人たちが小学校の行事で集い、集落を盛り上げるようになった。この頃は農業以外の生業もまだ行われていた。		
集い方	内容	
g	石割を行う	昔は石割りと石垣作りが生業として行われ、志土知の徳尾に大きな石切場と、宮城との境に石山があった。割った石は間知石にしてお宮や家、1971年には中九州横断道路の石垣を積むのに使われた。
h	子供の学校生活を介して大人と子供が集まる	志土知小学校の人数は少なかったが、年中行事を行い地域の人が集まった。1904年に植えられた大きなくすの木の前では、天気のいい日に子供が勉強をし給食を食べ、大人たちが慰労会をした。1961年には志土知幼稚園が併設されたが、1982年に宮城幼稚園と合併して宮城大幼稚園になった。現在はくすの木と門の石塔が残るが、校舎の跡形は無く校庭には雑草が生える。

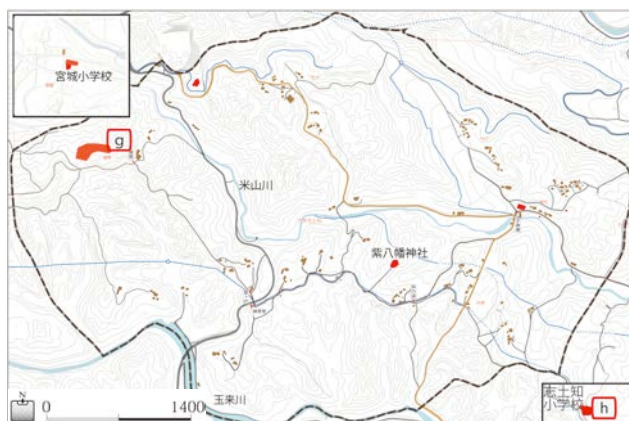


図-4 1950年代後半～1980年代の集落における集いの場所

4. さいごに

表-6 1980年代後半～現在の集落における集い

1980年代後半～現在		
近年では人口の高齢化と過疎化が進み、個人では農業や土地管理がたかひかない状況から、集落営農を行うようになった。現在は「紫草の里営農組合」を中心に、集落で農業とまちづくりに取り組む。		
	集い方	内容
i	クラブ活動を行う	宮城小は校舎を一棟だけ残して宮城公民館となり、老人クラブのカラオケや、料理体験教室などを開いて地域の人が集まる場を提供している。
j	小学校で地域イベントが行われる	志土知小と宮城小が合併して1986年に開校した宮城台小学校では、現在生徒数が23名である。年に一度開催される食彩祭りや、生徒と農家で行う脱穀体験などが行われる。
k	まちづくりに取り組む	以前は農協の倉庫だったが、紫草の里営農組合の設立に合わせて担い手研修センターとし、事務所として使うようになった。現在はここで営農組合の方たちが集まり、紫草の染色会なども行われる。
l	お宮参りをする	お宮参りといって、毎年元日に集落の人が午前9時に集まり、お参りをしてあいさつをする行事は今も続けられている。

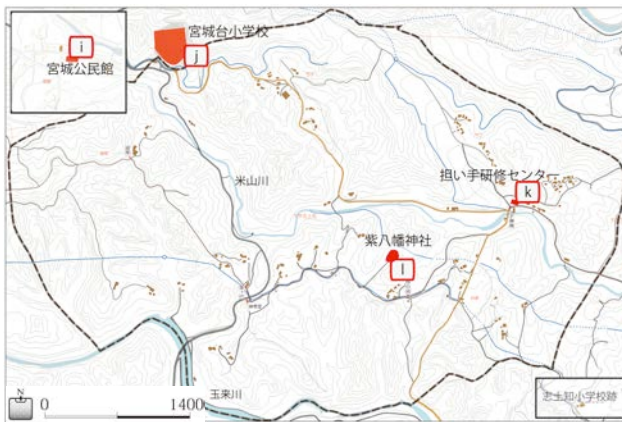


図-5 1980年代後半～現在の集落における集いの場所

1950年代以前は、各戸に基盤をおく農業が盛んであり、祭りや青年団の共同作業や行事などが行なわれ、子供の数も多く集落の人々が集う場が豊富であった。

1950年代後半から子供の数が減り、青年団の活動が衰退してきた時期には、集落の人々は小学校における子供達のイベントに積極的に参加し、子供達はもちろん集落全体を活性化する役目を果たしていた。

そして1980年代から農業の担い手が本格的に減少しはじめると、棚田の基盤整備、集落営農の実施、「紫草の里営農組合」を中心としたまちづくり活動など、集落全体での生業への取組みが行なわれ始めた。

志土知の集落の現在だけを見てまちづくりを語るとき組合の活動の中心となっている担い手センターや、地域行事が行われている宮城台小学校などに目が向けられる。しかし、時間を丁寧に追って集落を俯瞰的に捉えることにより、宮城峠の祭や、井路沿いの道の水車など、今は見えないが集落の歴史の中で重要な役割を果たしてきた地域の風景や、それを支えた生活の変遷が浮かび上がってくる。

新たなまちづくりの担い手の移住が推進されているなか、このような情報を共有し、今後の新たな集落の生活、風景をつくっていくことが重要だと考えられる。

今後は、まちづくりの現場でこのような口述記録を活かして具体的な方法に関する検討が必要である。

本研究の成果は以下の通り。

- ・ 志土知における集落の生活史についてオーラルヒストリーによる口述の収集・記録・整理を行い「志土知オーラルヒストリー」として記録した。
- ・ 口述記録の整理分析から、既往文献に掲載されていない新たな集落の風景と生活に関する情報を得た。
- ・ 志土知集落における風景と生活変遷について、人々の暮らしの中の「集い」に着目し、その変遷を追うことにより、志土知の風景とそれを支える人々の生活について考察を行った。

謝辞：本研究の調査とインタビューにおいて、志土知と竹田市の方々に多大なご協力を頂いた。紫草の里営農組合会長の佐藤征年氏をはじめ、インタビューを受けて下さった16名の方々に、厚く謝意を表する。

参考文献

- 1) 栗田英治：景観構成要素と農業形態の変化からみた棚田景観の変容，pp 239-244，2007
- 2) 山田裕貴：竹田における農村景観の変容と多層的共同体の関係性，2011
- 3) 後藤春彦：まちづくりオーラル・ヒストリー，水曜社，2005
- 4) 賀川光夫監修：竹田市史，竹田市史刊行会，1984
- 5) わが母校 竹田市立志土知小学校 閉校記念誌，志土知小学校，1985
- 6) 宮城小のあゆみ 閉校記念誌，宮城小学校，1985
- 7) 木村茂光：日本農業史，吉川弘文館，2010
- 8) 株式会社大分放送：大分歴史事典
- 9) 図でみる昭和農業史，農業と経済編集委員，1989